

音楽祭で活躍する日本人

「(ドイツの作曲家)ワーグナーを演奏してもイタリア・オペラのようになりません。(イタリアの作曲家)プッチーニの音楽の『うねり』が他の国のオーケストラでは出ません。音がうねっているのが時々見えることがあります。すべての音符を美しい音で歌わないと気が済まないのがイタリアのオーケストラです」

イタリアのマントヴァ歌劇場の音楽監督を務める吉田裕史は歌の国らしいイタリアのオーケストラの特徴をこう語った。吉田は今夏、プッチーニが住んだイタリアのトッレ・デル・ラーゴで開催されたプッチーニ・フェスティバルで歌劇「トゥーランドット」を指揮した。イタリア夏の4大音楽祭のひとつ、56回の歴史を誇るこの音楽祭で日本人がプッチーニ作品

from Editor

を指揮したのは初めてだ。

また、イタリアのペーザロで開かれたロッシーニ・オペラ・フェスティバルでは、園田隆一郎がロッシーニの「カンタータ『デイドーネの死』と『テティとペレーオの結婚』」でポローニャ歌劇場管弦楽団を指揮した。園田は「昔からあこがれていた音楽祭で指揮できたことが、本当にうれしかった。

ヨソ国立歌劇場の首席指揮者を務める。大野は7月、手兵を率いてフランスのエクサンプロバンス音楽祭に登場した。ストラビンスキーの歌劇「ナイチンゲール(夜鷺)」を、カナタ人演出家のロベール・ルパーシュの演出で上演、観客は総立ちで喝采を送った。

ロッシーニを愛する音楽家にとつてここで演奏するのは特別なことで大変光栄に思っています。演奏者や聴衆のロッシーニを愛する気持ちが劇場や街にあふれていまして」とインタビュウに答えた。

夏は音楽祭の季節だ。日本人音楽家がヨーロッパの音楽祭で活躍する光景が当たり前となってきた。ワーグナーの『聖地』で開催されているバイロイト音楽祭には、日本人メゾ・ソプラノ歌手、藤村実穂子が常連だ。また聴きに行ける音楽祭も多い。たとえば、小澤征爾が総監督を務めるサイトウ・キネン・フェスティバル松本は9月9日まで開かれる。

2人の先輩で、ヨーロッパで大活躍中の指揮者が大野和士。ドイツのバーデン州立歌劇場の音楽総監督、ベルギー王立歌劇場の音楽監督を歴任し、今はフランスのり

音楽情報誌「モーストリー・クラシック10月号」は「2010夏の世界の音楽祭」を特集し、世界の音楽祭を速報している。

モーストリー・クラシック (編集長 江原和雄)

編集長 江原和雄